

峯真太郎 × 原明子



今年のマスターズ秋田大会では優勝者こそ出なかったものの、毎年マスターズ大会にてコンスタントに成績を残す群馬県。今回はその群馬マスターズ軍団から、同じ道場の2人に登場いただいた。峯真太郎選手と原明子選手。2人はマスターズでの全国制覇が目標。そして夢は、2021年に日本で開催されるワールドマスターズゲームズ出場だ。そんな両選手に空手道人生とマスターズについて話をうかがった。

**みね・しんたろう**  
 昭和45(1970)年11月12日生まれ。埼玉県蕨市出身、群馬県高崎市育ち。5歳の時に空手を始める。拓殖大学紅陵高校から日本大学法学部政治経済学科卒業。日本スポーツマスターズは2015年の石川(金沢)大会から出場し男子組手1部で第3位に入賞。今年の秋田大会では男子組手2部で準優勝。現在、前橋市と高崎市でさくら整骨院を開業。全日本空手道連盟剛柔会所属技徳会さくら道場師範。全日本空手道連盟公認6段、全日本空手道連盟剛柔会公認6段。全国組手審判員、3級資格審査員。日本体育協会公認上級コーチ。

**はら・あきこ**  
 昭和49(1974)年10月8日生まれ。群馬県佐波郡玉村町出身。高崎商科大学附属高校から国際武道大学体育学部体育学科卒業。高校入学後に空手を始め、高校3年時には、群馬県内初の女子高校生選手として全日本選手権大会に女子個人組手で出場。日本スポーツマスターズは、2010年の三重大会から出場し、三重大会と2015年石川(金沢)大会で組手で準優勝。現在、全日本空手道連盟剛柔会所属技徳会さくら道場指導員。全日本空手道連盟公認4段。

取材・構成=寺島孝博(Terashima Takahiro)

■ 刑事ドラマがきっかけだった…峯選手

峯選手は5歳の時に空手を始めた。「当時、テレビで**Gメン75**という刑事ドラマがありましたが、出演した俳優さん(倉田保昭、原田大二郎)が空手っぽいアクションをやっていたのを格好いいなあと、空手をやってみたくなりました(峯選手)。「子どもの頃は言い出したら聞かない、自分からやりたいと言ったらやめない子だったので、親も承諾してくれて、家の近所にあった**技徳会(岸倶美師範)**に入門しました」。

当時は、**空手の稽古が楽しくてしょうがなかった**という峯選手。「嫌になったことはなかったですね。週3回の稽古でしたが、ほぼ休まなかったですよ」。そして中学校では卓球部に入部し、空手は道場で続けた。「中学には空手部はなく、空手に通じるフットワークとか速い動きの眼の鍛錬には卓球がいいなと思って、それで卓球部に入ったのです。とにかく、**空手を優先に考えていました**」。

■ 空手のエリートコースへ

高校は当時から強豪だった千葉県の拓殖大学紅陵高校へ進学。小さな頃は形が好きだったという峯選手だが、「**高校では組手が強くなりた**という意識がありました。群馬でも強い高校があるのですが、さらに厳しい環境を志願し県外の高校に進むことを決心したのです」。また峯選手は、この頃から自立心が強かったと話し、「親には悪いのですが(笑)、早く家を出たいというか、**県外の高校へ行って寮生活してみたいという気持ちが強かった**です」。

当時から厳しい稽古で知られた拓大紅陵だが、高校時代は関東大会では上位入賞するも、全国大会では好成績を残すことはできなかった。「部活の稽古も厳しかったのですが、高校の寮は他の部活の生徒と一緒に、上下関係もあり、それも厳しかったですね」。大学は日本大学に入学し、隆盛を極めていた空手部に入部。「当時の田辺文博監督が目をかけてくれたのですが、日大の先輩達はナショナルチームに入っている選手も多く、日大でやっていけるか不安を抱きながらも拓大紅陵の恩師・森章先生に後押しされて入学したのです」。

また、空手部には峯選手も含めて同期で8名が入ったといい、「同級生はすべて各出身高校の主将でした。同級生も強いし、先輩はナショナルのメンバーがいるし、1年と2年の関東大学大会までは試



日本大学空手部時代の峯選手(右から3人目)。2・3年生時には、全日本大学選手権団体組手で2連覇。中央は当時の故・田辺文博監督。



高崎商大附属高校時代の原選手(右から2人目)。平成4年の全国高校選抜大会では団体組手と団体形に出場した。

合には出してもらえませんでした」。

■ 空手の転機

大学2年の時に福岡国体で、群馬代表として成年男子組手中量級で3位に入賞した峯選手。「その実績を田辺監督に買われて、11月の全日本大学で団体のレギュラーで使っていただき、自分も全勝で優勝できました」。これで大学でやっていけるという自信を持てたと話す。「今から思えば、日大行って良かったと思っています。日本一の厳しい練習に耐えられて本当に良かった。2年、3年の時に全日本大学の団体で2連覇できましたし、**今の自分の土台です**ね」。その後は大学4年時から6年間、全日本ナショナルチームに在籍。世界大会は今一歩で出場は叶わなかったが、全日本選手権や国体で活躍した。

■ マスターズへのきっかけ

「以前から、原さんとか群馬でマスターズに出ている方々から誘われていて、一昨年の埼玉大会を見に行きました。見に行っても、正直言って興味が持てず、出ようという意欲はわかenかったです。でも、**昨年が空手を始めてちょうど40年の節目、またマスターズの組手1部に出るのが最後の年だったので、それでやってみよう!**と決心したのです」。



若い頃に果たせなかった夢を実現したいですね！



今年のマスターズ秋田大会では組手2部で惜しくも準優勝だった峯選手(写真右)。来年は絶対に優勝したいと意気込みを語ってくれた。写真左上、前列左から長男の福太郎君、長女の万有子さん、次男の百寿郎君。

### ■ 都会の高校に行きたかった…原選手

高崎市に隣接する玉村町で生まれ育った原選手。子どもの頃はそんなに運動をする子ではなかったという。中学では水泳部だった。「高校受験の際に、都会の学校に行きたいなと思って(笑)、高崎商大附属高校に入学しました。」

空手を始めたのは高校に入学後。一緒に入学した中学の同級生が空手道部に入りたいと言って、一緒に入部することになりました。「元々、武道には興味があり、皆んなで盛り上がり熱くなれる競技をやってみたいなという気持ちがありました。その頃、顧問の安斉義宏先生はナショナルチームに所属し、世界大会等でも活躍されており、先生の得意技である中段逆突きを徹底的に指導して頂き、今でも私の

組手のベースとなっています。」

また、同じ空手道部にライバルと言える選手がいて、「その子には絶対負けたくない頑張った」と振り返る。「高校時代は空手が大好きで、部活だけでなく、峯先生と同じ技徳会にも入門しました。気持ちが入り込む性格なんですね(原選手)。」

### ■ 県内初の女子高校生選手として全日本出場

空手に熱くのめり込み、努力もあって、高2時に茶帯で出場した流派の全国大会でナショナルチーム選手を倒し準優勝、高3時には群馬代表として全日本選手権出場を果たし3回戦まで進んだ。「嬉しかったですが、私があまりにもポンポンと勝って出ちゃったので、親は全日本選手権がすごい大会だというのが分からなくて(笑)。」

そして大学は、千葉県国際武道大学に入学した。「学連で結果を残したいと思い進学しましたが、1年ほど学連の大会に出られない時期があり悩ました。それでも、大学4年時に関東学生の個人組手で準優勝できた時は本当に嬉しかったですね。」

### ■ 原選手にとってのマスターズ

原選手は、大学卒業後就職し、約10年間空手からは離れていた。「34歳で復帰した際は、ルール変更や現役学生との対戦など、正直きつかったです。そんな時、マスターズ大会の存在を知り、生涯武道



今年は頸椎を患っていたこともあり、マスターズではベスト8に終わった原選手。来年は巻き返しを誓ってくれた。写真右上、右から長男の幸弥君、原選手、次男の奏弥君。



へ繋がる次のステージでもある全国の舞台で全国優勝してみたい、というのが出場への思いですね。」

### ■ とにかく優勝してみたい！

現在、峯選手は前橋市と高崎市でさくら整骨院を開業し、両所で全空連剛柔会所属の技徳会さくら道場師範として、道場生の指導にあたり、自身の稽古も行っている。

「全空連の全国大会での個人種目で優勝したことがないので、何とかマスターズで優勝したい。若い頃に果たせなかった夢を実現したいですね。また、

いずれは、自分の道場生からオリンピック選手を輩出したい(峯選手)。

原選手は今年5月中旬に頸椎のヘルニアを発症して、ドクターストップがかかった。その時、打撃系競技のゆえに「空手はダメです」と医者に言われたという。

「引退を迫られた感じでした。幸いにも症状が回復して、今回はコートに立てただけで嬉しかったですね。夢は2021年にワールドマスターズゲームズが日本(京都)であるので、出たいと思います。空手着に日の丸をつけたいな。」(了)



技徳会さくら道場高崎の練習日に取材させて頂きました。峯選手・原選手の指導のもと、小中学生を中心に元気一杯の稽古を積んでいます。

広 告 入 る